

中国業務通説

岸田首相の正体

➤ 4月5日の林官房長官の記者会見の発言だ。

冒頭、私(官房長官)から1件ございます。岸田総理大臣は、4月8日から4月14日まで、米国を国賓待遇で公式訪問する予定です。日本の総理大臣による国賓待遇での公式訪米としては、9年ぶりということになります。

短い発表で2回も「国賓待遇」という言葉を使う。

今回の岸田首相の訪米で、日本のマスコミ報道は枕言葉が必ず「岸田首相国賓待遇で訪米」で始まる。「国賓待遇」で訪米した日本の首相は岸田首相で9年ぶり、5人目なのだが。政府とマスコミが「国賓待遇」とき立てることで、米国が岸田首相をいままでの日本の首相とは別格の厚遇をして招待し、岸田首相が米国からいかに大物として重要視されているかという印象操作をしているとしか見えない。

多くの日本国民は「国賓(であること)」と「国賓(もどき)待遇」とが似て非なるもので、全く別物だということが理解できていない。外交儀礼上、「国賓」は元首にのみ与えられる処遇なのだ。日本は天皇が元首扱いなので、米国が日本から国賓で招く人物は天皇だけなのだ。国民は岸田首相が国賓として訪米するんだと早とちり。政権の狙いの中だ。



➤ 4月11日の岸田首相の米国議会演説での最後の締めくくりの言葉だ。

最後に、一言述べて締めくくらせていただきます。日本が米国の最も近い同盟国としての役割をどれほど真剣に受け止めているか。このことを、皆様知っていただきたいと思います。

私たちは共に大きな責任を担っています。日米両国は、平和にとって、自由にとって、そして繁栄にとって、必要不可欠な存在です。そう私は信じます。

信念というきずなで結ばれ、私は、日本の堅固な同盟と不朽の友好をここに誓います。

「未来のためのグローバル・パートナー」。今日、私たち日本は、米国のグローバル・パートナーであり、この先もそうであり続けます。

日本は米国と本当に「最も近い同盟国」、「堅固な同盟」で結ばれているのだろうか。米国が結んでいる軍事同盟だ。

米州共同防衛条約(リオ条約)	1948年～
北大西洋条約(NATO)	1949年～
ANZUS(豪新米同盟)	1951年～
日米安全保障条約(日米同盟)	1951年～
米比相互防衛条約(米比同盟)	1952年～
米韓相互防衛条約(米韓同盟)	1953年～
AUKUS(豪英米同盟)	2021年～

最も近い同盟国という意味がはっきりしない。物理的距離。米国とNATOとは大西洋をはさみ、米国と日本とは太平洋を挟んでいる。太平洋は大西洋より広く、大きい。従い米国にとり日

本よりNATOの方が距離的に近い。心理的距離。米国はイギリスからの移民が建国したアングロサクソン国家だ。日本はアジアの黄色人種国家だ。米国人にとり、民族としての親近感日本よりヨーロッパ人種が中心のNATOが近い。

またNATOの方が日米安全保障条約より堅固な同盟だ。NATOでは加盟国の1カ国が外国から軍事攻撃を受けた場合にすべての加盟国は無条件で参戦することが決められている。日米安全保障条約で日本が軍事攻撃を受けた場合に、米国は無条件での参戦ではなく、議会の同意を得たら参戦できると決められている。日本が軍事攻撃されても、議会が参戦に同意しない限り、米国政府は参戦できない。

こうしてみると日本と米国が最も近い同盟国もなく、堅固な同盟でもない。岸田首相の片思いに過ぎないだろう。歯の浮くような言辞を弄して米国国民に媚を売ったが、完全に空振りに終わった。役人の書いた原稿の棒読み演説だったろう。あまりにも軽い総理大臣。

➤ 4月23日に配信したAERA dotに古賀茂明氏が『岸田首相はなぜアメリカに隷属したがるのか背景にある深刻な「ナルシズム」と「白人コンプレックス」』との文章を寄せた。古賀氏は言う。

それにしても、岸田首相はなぜここまで卑屈になって、米国に取り入ろうとするのか。

私は、その背景には、岸田氏個人のコンプレックスと対をなす安倍の「ナルシズム」と「白人コンプレックス」があるとみている。実は、それは安倍元首相と瓜二つだ。

安倍氏も岸田氏も、米国大統領と共にある時、喜びに満ち溢れた顔を見せた。その象徴が、大統領との自撮りツーショット写真である。スマホに向かって満面の笑みを湛えたその瞬間、彼らは、心の中で「見てくれ！俺はアメリカの大統領と自撮りツーショットを撮れる仲間なんだぞ！世界中でそんなことができるのは俺だけだ！」という歓喜の叫びをあげていたのだろう。

安倍氏の時は安倍氏自らがトランプ氏との写真を自撮りしたが、今回はバイデン氏に自撮りをさせたということで、岸田氏は「安倍を超えた」と自慢したいことだろう。一体誰が仕組んだ演出なのかかわからないが、岸田氏にとっては、至福の時だったに違いない。



安倍晋三の父・安倍晋太郎も岸田文雄の父・岸田文武も東京帝国大学法学部を卒業した。息子はともに東大に入学することはできなかった。二人は東大に入れない男は人間とみなされない家系に生まれたのだった。古賀氏は言う。

安倍氏は子供の頃から自分をバカにしてきた母親への反骨心からでる東大卒の祖父・岸信介という大きな壁を越えようとするがあまり、学歴コンプレックスが変化したナルシズムに取りつかれた。

岸田氏は開成高校出身ながら2浪しても東大に合格しなかったことを今なお揶揄されることへのコンプレックスへのリベンジ精神から生じた、「俺は本当はすごいんだ」というナルシズムに浸る。

二人は親から褒められることはなかった。そこで、親よりも偉い米国の大統領から褒められることに人生最高の時を感じたのだった。

二人は東大に入れなかったコンプレックスが、総理大臣になったときにほかの総理大臣が躊躇して出来ないことを平然と実行するエネルギーとなった。日本をほかの総理大臣では出来ない国にすること、すなわちこの国を滅茶滅茶に壊すこと、で自分をバカにした親、一族を見返すことができるのだ。

東大卒の高級官僚が、毎日列をなして官邸に詣でて総理大臣の前で跪（ひざます）く。入学できなかった東大へのコンプレックスが、東大卒の人間を顎で使うことでナルシズムに変わった。

シミントウニ クニノウンメイヲ マカセタラ ニホンハホロビルヨ。(横井幸夫 元東レ株式会社)